

週刊センターニュース No.152



第152号(2007年4月2日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第144回共同学習会のご案内 ○●○

日時: 4月4日(水) 13時~14時30分(曜日時限が通常と異なりますので、ご注意下さい)

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階会議室

報告者: 石田啓氏・大学院自然科学研究科長

テーマ 「オープンキャンパスをどうするか」

趣旨: 本学は、来年4月に予定している3学域化について、高校生・保護者・高校教員にどのように伝えるかという課題に直面している。広報の巧拙がそのまま、今後の本学受験者の質・量における動向に直接影響を与えると予想され、本学に高校生たちが直接訪れてくれる貴重な機会であるオープンキャンパスの企画に慎重に取り組むことが必要となる。石田教授には、これまでの工学部での取り組み経験をご紹介していただくとともに、今年8月8日・9日に予定されているオープンキャンパスについてのご提言をいただく。各部局で学生募集に直接関わっていると否とに関わらず、オープンキャンパスについてのアイデアをお持ちの教職員・学生・院生の参加を期待する。

○●○ 第12回FDフォーラム「学生が伸びる大学教育」参加報告 ○●○

2007年3月3日(土)、4日(日)に、財団法人大学コンソーシアム京都主催の第12回FDフォーラム「学生が伸びる大学教育」に参加した。3日は基調講演とシンポジウム、4日は2つのミニシンポジウムと6つの分科会が行われた。

本稿では、第2ミニシンポジウム「授業アンケートは授業改善につながるのか? —学生と教員の声—」について報告させていただく。シンポジストは、濱名篤氏(関西国際大学学長)、米谷淳氏(神戸大学大学教育推進機構教授)、中村博幸氏(京都文教大学人間学部教授)、コーディネーターは、松本真治氏(仏教大学教授法開発室室長)、藤岡秀樹氏(京都教育大学教育学部教授)であった。

全体の流れとしては、1. 松本氏による趣旨説明に続き、2. 4名の仏教大学学生による授業アンケートへのコメント、3. 藤岡氏による京都教育大学での授業アンケートについての説明、4. 前述の4名の学生へのシンポジストからの質問、5. 各シンポジストの報告が午前中にあり、午後は、6. フロアを交えてのパネルディスカッションであった。それらの中で2、4、6における興味深かった学生の声、フロア、シンポジストからのコメントをいくつか紹介させていただく。

学生:

- ・ 結果がどのように活用されているのかよくわからない。
 - ◇ まじめに答えるモチベーションが下がる
- ・ 学期末に行われるので、その学期に授業を受けている学生にはメリットがない。
 - ◇ 学期途中に行えば、学期中に改善できるのでは。

- ・ 教員の意識改革、授業改善に役立っているのかがわからない。
- ・ 同じ授業を受けた学生の声を聞きたい。
- ・ 授業アンケートを授業時間中に行くと、授業の時間が取られてしまう。
- ・ 教員、授業毎に独自の質問項目があっても良いのではないか。
- ・ 全授業対象でないので、改善して欲しい授業ではアンケートが実施されていない。
- ・ Web で授業アンケートを実施した場合は、すごく良かったもの、すごく悪かったものだけにだけ回答する。
- ・ 授業アンケート回答率向上策として、ご褒美作戦はあまり効果がないのでは。強制化すると回答はするだろうが、そこまでする必要があるのか。そこまでするなら、結果の公開、改善策実施など責任を持って対応して欲しい。
- ・ なぜこの授業を履修したのかなど学生の意見を聞くものと授業方法の改善点などについて聞くものが混ざっているのを、整理して欲しい。
- ・ 学生と教員の信頼関係が重要。

フロア、シンポジスト：

- ・ 授業アンケート自由記述の情報共有は重要、数値ポイントだけでは見えてこない部分が見えてくる。
- ・ 慶応 SFC では、Web 上で授業アンケート実施。原則全て公開（中傷等については非公開の権利を有する）。教員は必ずコメントをつける。
- ・ 授業方法（板書、声、その他）については、学期中にアンケートを行えばすぐにフィードバックできるのでは。
- ・ 徳島大学では、授業開始から一ヶ月後に主に技術面を開くアンケートを実施し、一週間以内に集計し、教員へ返す。教員はコメントをつける。学期終了直前に改めてアンケートを実施。そこでは、中間アンケートをどの程度反映させたかについても質問する。授業改善はあくまでも教員個人の判断であるが、上記方法により、3年間で基礎科目の学生からの評判は上がった。
- ・ 授業アンケートは、学生と教員と一緒に成長するためのものとする。
- ・ 授業アンケートが教員評価の全てではない。
- ・ 授業アンケートだけで、授業改善を図るのは無理。
 - ◇ ピアアセスメント（授業見学）、グループフォーカスインタビュー（受講生へのインタビュー）などと組み合わせるのが効果的。
- ・ 単独の授業だけで役立ったかどうかの判断は困難。
- ・ 他の授業とのつながりなど、カリキュラム全体での位置づけがわかるのは、後になってから。
- ・ 授業アンケートは、学生のための授業改善に役立てることが大学としての責任。

今回のシンポジウムでは、当事者としての学生の参加もあり、かなり活発な議論が交わされた。紹介したコメントにもあるように、学生からは授業アンケートについて、結果の公開、活用がなされていない点への不満が大きいように思われる。同様の声は、金沢大学でもあると思われる。一方、フロア、シンポジストからは、教員側の立場から、授業アンケートの効果的な実施例や、授業改善とのつながり、評価との関係などについてのコメントがなされた。これらの流れを受け、ミニシンポジウム終盤では、「授業アンケートを大学教育の総和をはかるものとして組織的 FD と位置付け、学生、教員、理事者間の信頼関係構築ツールにすべきではないか」という意見も出た。

このミニシンポジウムに参加してみて、概して、総花的にあれもこれも聞いてしまう授業アンケートではなく、2～3の技術面の質問と自由記述だけ、または、集計して比較することは出来なくなるが、趣旨を十分説明した上で、全てを自由記述で行う授業アンケートの方が効果的ではないかと考えるようになった。どちらの場合でも、個人攻撃は排除した上での結果の公表が、大学教育における信頼関係構築には非常に重要であることは言うまでもない。（文責 教育支援システム研究部門 堀井祐介）